「指導目標に基づいた『書くこと』の指導の実践と課題」

山梨県立甲府南高等学校　国語科

1. **課題の内容**

本校は1年次の段階で、「書くこと」で培う力を以下のように設定している。

自分自身の体験（読書等）を根拠としながら、自分の考えをまとめることができる。

（例えば、「○○を読んで」という600字程度の感想文の執筆にあたり、今までの体験（読書体験・新聞での情報）を例として使いながら、自分の意見を書くことができる。）

しかし、進学校ということもあり、なかなか書くことに授業時数を割くことができていない現状がある。今後新学習指導要領で『書くこと』も多くの時間をとらなければならない。まずは、『書くこと』を授業で実践してみる中で、現状の生徒の力を把握し、上にある指導目標とのズレがないか、確認することを課題とした。

1. **課題改善に向けた具体的な取り組み**

①国語総合現代文編（三省堂）「なぜ私たちは労働するのか？」（内田樹）を読む。

②自分が考える『労働』の意味を記述する（600字：自分の体験や読書経験を『根拠』として示すよう指示）

③クラス内で相互に読み合い、他者の考える『労働』の意味とどのように違うのかを確認する。

④他者の考え方も踏まえて、自身の文章を書き直す

1. **取り組みの成果とその要因**

体験や経験を根拠として示す指示をしたことで、生徒がそれらをどのように文章に組み込むべきなのか、『取り入れ方（情報の使い方）』を理解していないという状況が理解できた。ただ書かせるのではなく、その『書かせ方』が授業においては重要であるということが認識できた。（情報の使い方＝現代の国語で求められる力と認識）

1. **取り組みの中で感じられた課題と考えられる原因**

・文章を活かしきれなかった…文章を読んだ後で「労働観」を書かせたが、生徒が筆者の意見に流される、あるいは文章を踏まえずに考えてしまうことが多かった。本校では2年次までに以下の指導目標を設定している。

根拠となる資料を自分自身で探し出し、明確な根拠をもとに自分の考えを順序立てて記述することができる。

（例えば、「働く」というテーマで800字程度の意見文の執筆にあたり、『問題提起-意見-根拠-まとめ』などの展開に注意しつつ、必要な資料を示しながらまとめることができる。）

まずは①各自の労働の意味を書かせ、その後②文章を読み、③筆者と自分の勤労観を対比させるなかで『順序立て』を考えさせる流れにするべきだった。

・評価の難しさ…書くことの評価の難しさを実感した。教師だけの評価は難しい。今回時間がなくてできなかったが、文章の書き直しの際、どのような点を改善したのかを自己評価させるようなプリントが必要であった。また、生徒同士での相互評価も行い、複数の評価で単元全体の評価を構成するべきだと感じた

1. **（４）で感じられた課題に向けての改善策（案）**

・年間計画の重要性…今回の授業は年度末に実施したということもあり、振り返りが不十分であった。どの時期にどのような力をつけさせるためにどのような活動を行うべきか、しっかりと練る必要性を感じた。またそのためには、各学年担当が単年度視点で授業を行うのではなく、つながりを持った計画を国語科の中で共有していくことが大切であると感じた。

・指導目標の細かな訂正、共有化…生徒の実態に合わせ、指導目標を少しずつ見直すことが大切ではないか。本校に関して言えば、「読むこと」はともかく、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」はなかなか実践が少ない状況が長年続いている。当然指導目標もこちらが意図しているものと生徒の力との乖離が見られる。今後実践を重ねる中で、徐々に訂正することが必要だと思われる。（例えば、1年次の指導目標例は「感想文」の執筆とあるが、「意見文」として書き、2年次に同じ意見文を「順序立てて」あるいは「自ら探した資料」をもとにして書くという力の育成にするほうがスムーズであるのではないか。）